

〔研究ノート〕

蔡元培『中国倫理学史』と中国哲学史の成立

——明治日本の倫理学書を介して——

龔きよう

穎えい

はじめに

筆者は、かつて、明治維新の後、日本における西洋倫理学 (Ethics) の受容が本格的に展開され、幾つかの発展段階を経て個性に富む日本近代倫理学を作り上げたと同時に、一九二〇年代までになされた日本倫理学関係の翻訳と研究の成果が、草創期に当たった近代中国の倫理学に多大な影響を及ぼした、⁽¹⁾ ということを指摘してきた。また、このことを例証するために、いくつかの拙論を発表し具体例も示してきた。本稿は、更に視野を広げて倫理学という専門分野を超えて、明治期日本の学界における東洋倫理学史や支那思想史関係の成果が、蔡元培 (一八六八―一九四〇) の著書『中国倫理学史』を通して、近代中国における中国哲学史の成立へ与えた影響について考えてみたいと思う。

さて、中国における近代的学問の成立については、明治期日本からの影響を避けて通れない。このことはすでに学界の共通認識になっているであろう。「中国哲学史」という近代的学問分野の成立もその例外ではない。た

だし、今までのほとんどの論述が、松本文三郎（一八六九―一九四四）や遠藤隆吉（一八七四―一九四六）などの手による支那哲学史関係の著述に注目し、これらの著述の「中国哲学史」の成立に与えた直接的な影響を重視してきたが、明治期の倫理学界に現れた重要な学術成果である中国倫理学史関係の書物の影響は無視されてきた。当時、これらの中国倫理学史関係の著述が「東洋倫理（学）史」という名で伝播され、蔡元培などの学者によって中国に紹介され、近代中国における倫理学史のみならず、中国哲学史の創成にも一助を与えた可能性もあるはずだ。言い換えれば、今までは「明治日本の東洋倫理学史→蔡元培『中国倫理学史』→胡適、馮友蘭の中国哲学史」というような伝播のルートが先行研究でほとんど看過されてきたため、ここでは具体的な文献を示しながらその実態を探ってみたい。

本稿で考察の対象として用いる日本側の主な史料は、木村鷹太郎著『東洋西洋倫理学史』（一八九八年）「東洋倫理学史」の部分と、久保得二著『東洋倫理史要』（一九〇四年）、遠藤隆吉『支那哲学史』⁽²⁾（一九〇〇年）であり、中国側の史料は蔡元培著『中国倫理学史』、胡適（一八九一―一九六二）および馮友蘭（一八九五―一九九〇）の関係著述などである。

一、蔡元培と明治期日本倫理学・哲学界の諸成果

さて、明治日本で書かれた中国倫理学史関係の著述が中国語圏で本格的に受容されたのは、中国人学者蔡元培から始まる。蔡元培は『中国倫理学史』を著作するにあたり、日本人の書いた支那哲学史や東洋倫理学史を大いに参照した。蔡元培は『中国倫理学史』「緒論」の中で、本書は「木村、久保二氏の著作を本にした」と明言し